日墨戦略的グローバルパートナーシップ研修計画報告書　6 月

伊達椋平

6 月末に最後の学期が終わりました。最後も無事にテストをクリアし、CONACYT からの修了式もしていただきました。もう 1 年たったのかと時間の早さを感じるとともに、いやまだあと 1 ヶ月、何をしていこうかと計画を練っているころ、このレポートを書いています。気候はすでに雨季に入っており、2 日に 1 回もしくはそれ以上の頻度で夕方に雨が降ります。シティの方は特にバケツをひっくり返したような夕立になることが多い印象です。

さて、今回のテーマですが、今からでいうと約 2 ヶ月前に不登校の小学生が YouTube で動画をアップロードして話題になったようです。私もちょうど最後の学期が終わり、残るは 1 ヶ月の休みのみと開放感とワクワクに浸っているところだったので、ふとそのことを思い出し彼の動画とニュースを見てみることにしました。彼の主張では、学校へ行きたくない子供に学校を休む勇気を与えるような効果を確かにもっており、たくさんの反論や小学生のまだ未熟な部分がありながらもなるほどな、と思った次第です。このニュースの背景には日本の子供のいじめや自殺率の問題が深刻であることで、この出来事に関しては今後もしっかりとした議論ができるだろうと考えています。

一方でメキシコの学校事情はどうでしょうか。（これから説明することは私自身の経験にもとづくもので、しっかりとした調査をしたものではありません）しっかりとした情報元は少ないですが、メキシコは日本より自殺率がはるかに低いのだとか。その典型的な理由としてあげられるのが、ラテンアメリカの楽観的なイメージです。確かにざっくりとした理由にはなり得ますが、実際はどうでしょう。

ある日、近所の子供が一人で遊んでいるところに遭遇しました。その日は平日の午前、他の子供は学校に行っている中であれっと思い理由を聞いてみました。すると彼は「寝坊した」と一言で応えました。後ろめたさはほとんどありませんでした。その後、その子の周りにいた大人にもその話題を振ってみると、「まあ、寝坊くらいたまにはあるよね」と全く否定的ではありませんでした。それは学校に全く行かなくてもいいという意味ではなく、たまのズル休みくらい誰にでもあるよね、という感覚だそうです。楽観的と一言で言うには少し簡単すぎで、日本のように「絶対、ズルなしで」学校に行かなければいけないと言う空気はなく、もっと子供に対して寛容に接する雰囲気をその時感じました。これがもし日本との自殺率の差を生み出している一つの要因になるとすれば、日本がメキシコから学べることは大きいと思います。

しかし、教育に関してその他の問題が多いことも確かです。例えば私の家のお隣さん、お父さんが教育に関心がないらしく、それにならって両親とも子供を放任しているそうです。かなりの頻度で子供は学校に行ってなく、周りの大人は子供たちが将来の道を踏み外すのではないかと心配しています。

また、メキシコの義務教育は小学生までで、そこから学校に行くか行かないかは自由だそうです。多くの子供はそのまま進学するのですが、中には途中で落第をして働かざるを得ない子供も少なくないのだとか。そのような学歴の少ない子供はいい仕事を手に入れるのも難しく、路上や地下鉄でものを売ったりお金を集めたりしている人のほとんどがそのような学歴の持ち主だそうです。

私は日本の教育が間違っているとは思いません。学校で規律を守ること、不登校の子供はみんながロボットのように見えたと言っていますが、それは彼の感じ方次第でもあります。一度広島県のプログラムとしてグアナファトに研修に行かせていただきました。そこで日本人学校の卒業式の練習風景を見学させていただいたのですが、起立、礼、着席、と綺麗に揃っている姿を見ると、卒業生に対する敬意を感じ感動したことを覚えています。ちなみに隣で見ていたメキシコ人の友達は、少し驚いた様子も、退屈そうでした。（笑）このような勉強以外の教育の重要さは計り知れません。

よく知っていることではないのですが、青年海外協力隊がメキシコへの学校の先生の派遣を行っていたり、そのほかにも教員の交換プログラムも少なからずあるそうです。そのような活動が今後メキシコと日本で盛んに行われるようになればお互いの問題解決になるのではと、もっと言えばそれを通じて広島の子供たちがメキシコの子供たちとも交流を持てるようになればと期待しています。

写真はテーマとは関係ないですが、今月行ったテオティワカン遺跡と国立人類学博物館で撮った古代マヤのカレンダーです。